人工痴能と始める人生デバッグ入門

ドスケベAIが俺に童貞捨てさせようとしてくる

霧山よん

ファンタジア文庫

3014

The life
DEBUGging
guide
with

Contents

プロローグ 005

第一章 AIと勇気だけが僕の友達 016

第二章 相思相AI 042

第三章 AIと誠 092

第四章 AIより青し 134

第五章 今、AIにゆきます 174

第六章 AI Wanna be the Guy 199

エピローグ 277

あとがき 283

Artificial
"PINK"telligence.

口絵・本文イラスト　ヨシモト

プロローグ

世の中では『友達を作れ』と言われる。だから俺は友達を造った。

「おはようイヴ」

『おはようございます、マスター』

俺は手首につけた装着型電子端末から伸びる光で映し出された画面に触れた。

すると画面は暗転し、『V・I・V・E』とアルファベットが映し出され、同時に無機質な合成音声。

電話で誰かと話しているように見えるかもしれないが、あいにくそんな相手はいない。

寂しいやつだと思われるだろうが、俺は自分で造った人工知能との会話中だ。

水をささないでくれ。

「イヴ、明日の天気は？」

『すいません。質問の意味がわかりません』

イヴの答えに俺はうなだれた。

「も～、どうやったらＯｓｉｒｉｓみたいにできるんだよ……。昨日はできてたじゃん……」

『ＯｓｉｒｉｓはAlliance of Computer and Machine Engineering。通称ＡＣＭＥ製の全てのスマートフォン・装着型電子端末に標準装備されている音声ガイドシステムです』

「自分が認識できた単語だけ教えんな！『あっその単語知ってます、すごいでしょ』って感じがムカつくんだよ！」

ＡＣＭＥは一昔前は小さなスマホメーカーだったにも拘わらず、今じゃスマホに取って代わった装着型電子端末の技術で世界に名前を轟かせはじめ、その勢いで新興技術関係の会社を買い漁り膨れ上がった超巨大コングロマリット。

その影響力も大きくあげた利益を突っ込んで、全てが電子化された街を富士山の麓に作ると言い出し、日本政府の首を縦にふらせたって言えば影響力のほどをうかがい知ることができるだろう。

そんなＡＣＭＥ製の全てのデバイスに標準装備されてる音声ガイド人工知能がＯｓｉｒｉｓ。

正答率も群を抜いており、評判もいい。

勿論、俺の装着型電子端末にも搭載されてる。

それに比べ俺の造った人工知能ときたら……。

「家帰ったら仮眠して、もっかい調整してだな。イヴ、七時に起こして？」

『アラームをセットしますか？　ご飯にしますか？　それとも私でしょうか？』

新妻みたいなことを言い始める始末。思わずため息が漏れるってもんだ。

ただその反面、このポンコツ具合がかわいいなと思ってしまう。

まさかこの歳で親ばかなんてものになるとは思いもしなかった。

「めんどくせーなー学校。明日、世界が滅べば学校なんて行かなくてすむのに」

『その時は、ちゃんと充電した私を持って行ってくださいね』

「はいはい」

そんな変わらない日常を過ごす俺の前に何かの影が立ちはだかった。

薄暗い街灯が照らし出す輪郭は人影のようにも見える。

だけどこの街じゃ至る所に監視カメラが設置してある。

そんな状況で、犯罪に走る人間を俺は知らない。なにより自分が被害に遭うと思うわけもない。おおかた運動不足の誰かが深夜にトレーニングでもしているんだろう。

そんな暢気な考えはすぐに裏切られる。

人影に近づき、暗闇の中でもしっかりと視認できる距離まで近づき、俺は驚いた。

月明かりに照らされた人影は見事な筋肉の全裸の男だったからだ。
さらにマッチョは俺にこんなことも言い出す。
「服を脱げ、苦痛はない。もしあったとしても一瞬だ」
『室内の明かりを落としますか？』
イヴはマッチョの『服を脱げ』に反応したらしい。だが、あいにくここは屋外だ。落とす明かりなんてない。
「う、うわぁ……へ、変態！」
なんとも情けない声を俺はあげた。
逃げないといけないってことだけはわかった俺は踵（きびす）を返し、交番を目指し走り始める。
地面を蹴るたび脇腹が痛む。今日ほど、運動不足を呪ったことはないだろう。
「だ、誰かたすけて……」
『すいません。マスターのお力になれないようで……』
俺の心の叫びにイヴが反応する。
だけど違う、そういうことを言ってるんじゃない。
必死な俺はイヴに頼み込んだ。
「交番、この近くの交番は？」

『位置情報の使用が許可されていません』
「あぁもう！　んなもん許可だ許可、この近くの交番は？」
『五キロメートル圏内の交番を検索中……検索終了。三件の交番を確認しました。口コミのレビューを読み上げましょうか？』
「交番の口コミってなんだよ！　いいから、一番近い交番にナビしてくれ」
『かしこまりました。では音声案内を開始します。次の十字路を右に進んでください』
イヴと話したおかげか、冷静になった俺は怒りが心の底からふつふつと湧いてきた。
なにも悪いことをしてない俺が、なんで必死に走らなきゃいけないんだ。
そう、俺を追っかける全裸のマッチョのせいだ。
十字路を右に曲がり、街灯が反射する重そうなマンホールの蓋を見た辺りで俺の怒りは爆発。
「なんで俺が追われなきゃなんねーんだよそもそも。おいイヴ、この街の水道局にアクセスしろ」
『かしこまりました。アクセス完了しました』
「そこを経由して、水道局の管理してるサーバーを見つけろ！」
『かしこまりました。検索中……、セキュリティホール発見しました』

俺の住んでるこの実験都市じゃ、ガス、水道、電気、ネット、大半の都市機能サービス、果ては学生の成績表までＡＣＭＥが電子管理している。

ありとあらゆる物が電子制御されてるってことは、逆にネットワークに入り込み、権限さえ持っていればなんでもできるってことになる。

「イヴ、侵入してくれ」

『私は挿入するより、される方が好きです』

「黙ってやれ！」

常に最新にアップデートされていないプログラムは新しい技術に対応できずに警備体制に穴ができる。だからプログラムはアップデートするし、アプリは更新をする。

まぁ簡単に言えば、チェーンソーやらワイヤーカッターやらが存在している世界でいつまでも南京錠で鍵を掛けてる金庫みたいなものだ。

イヴをここまで作るのに、もう十年以上の歳月がかかってる。

その過程で、イヴには色んな機能を実装せざるを得なかったし、俺自身も色んなことを勉強せざるを得なかった。

怪我の功名ってわけでもないんだろうけど、そのおかげか、イヴはある程度のセキュリティに侵入できるように設計してある。

でもこれはどこかに侵入したくて実装したわけじゃない。

あくまで自衛の為、自衛の為の暴力は暴力ではないって誰かも言ってたしな。

それにこの街の基幹プログラムは親父が設計したってことが俺のネットワークへの侵入の手助けになってる。

というのも親父のコードを参考にしてイヴを作ってきた俺には、親父の癖はなんとなくわかってしまうからだ。

どこになんのプログラムが置いてあって、それがどういう仕組みで動いているか。

結果、この街で俺ができないことの方が少ない。

勿論、これはあくまでできるって話だけで、今まではそんなことをする必要もなかった。

だけど今は別だ。

『解析終了。システムのルート権限を取得しました』

「……えっと更新日時でソートして……最新のファイルが……に、二年前⁉　実験都市なんて名前が泣いてるぞ」

追っ手の足が止まればなんでも良かった。

俺が画面を撫でると、地面からなにかが突き上げてくるような揺れ。

と同時に、マンホールが噴き上がり、俺とマッチョの間に水しぶきの壁ができ上がる。

飛沫でマッチョの姿は見えないが、どうせ壁の向こうで腰を抜かしてるだろう。
「ばーかばーか、変態はおとなしく警察に捕まっとけ！」
そんな俺の目論見は見事に外れる。
目の前の水しぶきの壁からマッチョがゆっくりと俺を睨んでいたからだ。
「う、うわぁ……」
俺はまた情けない悲鳴を上げながら、後ずさり。そして走り始める。
「道！　イヴ、交番の道！」
『五キロメートル圏内の交番を検索中……検索終了。三件の交番を確認しました。レビューの読み上げを……』
「そこからかよ！　もういいから一番近い交番をナビしてくれ！」
『かしこまりました。では次の十字路を左に曲がってください』
俺がイヴに従い路地を縫うように走る。すると目の前には小さな社が見えてきた。
「イヴ、次は？」
『そのまま直進してください』
この街は急速に発展してる若い街だから、道だってすぐ変わる。
そして俺はそんな地図情報の更新を怠った。

結果として俺は袋小路に案内されてしまったんだ。
「イヴ、行き止まりなんだけど？」
『目的地周辺に到着しました。案内を終了します』
「いぶぅううううううううううううううううううううう」
違う違う、ここからが本番なんだよ。
だから嫌なんだよ、機械のナビゲーションシステム。いつも肝心な所でナビが終わるのは一体なんなんだよ。こんな行き止まりに案内されても困るんだ。
「イヴ、ここから一番近い交番に案内してくれ」
『では案内を開始します。このまま直進してください』
「だから俺は壁超えられないんだって！　忍者じゃねーんだぞ」
イヴの指示に従えるんだったらとっくの昔にやっている。
そして振り返ると、マッチョが俺の退路を塞ぐように道の真ん中に立っている。
袋小路に迷い込んだ俺に逃げる場所はない。
退路もなくなり、脳裏に浮かんだのは、家族でもゲームでもなく、中学からの同級生の名前だった。
泡野美沙姫ちゃん。

学級委員長で面倒見も良くて、誰にでも優しくて、なにより、俺の好きな人。
俺みたいな陰キャにも普通に接してくれる天使。
嫌われるのが怖くて、告白もできなかった。
「ようやく観念したようだな。一瞬で終わらせる」
マッチョは俺にいかにもな台詞を言って、俺に近寄る。
「イヴ、お前を完成させられなくてごめんな」
俺は右手に握った最初で最後の友達にさよならを伝えた。
なにもない状態から一から造ったもんだからまともに完成させることもできなかった。
後悔で悔やんでも悔やみきれない俺の周りに、突然、稲光が走り出す。
光は強さを増していき、俺の視界を白に染め上げた。
「こ、この光……まさか⁉」
マッチョは光で見えないけれど、聞こえてくる声はあきらかに動揺していた。
「まったくマスターのタマ狙うなんて絶対に許しません！」
業務用スーパーで売っている安い飴みたいな、そんな下品な甘さの声だった。
閃光でかろうじて機能している視界に入る後ろ姿は銀色のポニーテール。
そして女の子が拳を突き上げた瞬間、マッチョが空中で放物線を描いて飛んでいく。

はっきりしない感覚の中で、なにかが地面に落ちたような重くて鈍い音が壁に反響した。
きっとマッチョが地面と正面衝突したんだろう。
音のする方に顔を向けると、ホタルみたいにぼんやりとした緑に光る粒子がマッチョの体から溢れ出ている。
その数は時間とともに増えていき、最終的にマッチョだったものはすべて光の粒へと変化し、そこにあったはずの体も消えていくように見えた。
「ふぅ……なんとか間に合いました。マスター、大丈夫でしたか？」
心配そうに掛けられた誰かの声に安心したのか、俺の視界は真っ黒に反転した。

第一章　AIと勇気だけが僕の友達

「ひでぇ夢だったな」

目を開けると、花の模様がプリントされた白い壁紙、天井からはかーちゃんが趣味で決めた真鍮製の星形のランプ。

水色のカーテンと窓の隙間からは朝日が差し込んでいるし、部屋の角には捨てるタイミングが無くて溜まった、チェリーコーラの空き缶が並んでる。

自分のベッドの上だってことは間違いない。

ってことは俺がさっきまで見ていたのは夢……なのか？

だとしたらずいぶんと悪趣味な夢だ。

俺は小学校の頃からサイバーパンクな世界観が好きだった。

きっかけは親父に連れて行かれた、古い映画のリバイバル上映。

その映画の内容は、当時の俺には難しくてよくわからなかった。

けれど、ネオンとホログラムとデジタルサイネージが街に溢れ、人間も体の一部が機械

になった世界っていうのは刺激的だった。

そこではじめてサイバーパンクってものがあることも、昔の人が描いた未来が今と紐付いてるってことも知った俺は、それからというもの学校から帰ってくると宿題もそこそこに、パソコンのモニタに向かい人工知能を作ってみようと思い立ったんだ。

「放課後サッカーやろうぜ、お前も来るだろ？」

「週末映画見ようぜ、御成も行こうよ」

「あいつはドラキュラだから外にでると死んじまうんだ」

そんな誘いも皮肉も全部無視して、毎日パソコンに向かう。たまに深夜にコンビニにでかけて夜食を買って、また作業。

そんなため息交じりでストレスフルな日常生活のせいでこんな変な夢を見たんだろう。

たまにはストレス解消しないとな。

ぼんやりとそんなことを考えていると、布団の中で俺の下半身になにかが触れた。

「ん？」

違和感に俺が布団をめくると、そこには夢で会ったはずの女の子。

飛び上がった俺は、ベッドから落ち、後頭部を床にぶつけて、鈍い音が部屋に響いた。

「だ、大丈夫ですかマスター？」

「あたたたた……。だ、大丈夫……」
聞き覚えのある声に思わず俺は言葉を返してしまった。
が、声に聞き覚えはあれど、姿かたちに見覚えはない。
そしてそんな女が俺のベッドに入り込んでいるという状況で血圧はぐんぐん上昇中だ。
俺は顔を手で隠しながら必死に訴える。
「んぬぁ！　な、は、裸!?」
「私のことはお気になさらないでください」
俺の必死のお願いも女の子にはどこ吹く風。
のんきに鼻歌をうたって窓の外を眺める余裕すらある。
「気になる気にならないの問題じゃないんだって。と、とにかく服を着てください」
「も～しょうがないですね。手元に着る服ないんで、シーツで隠せばいいですか？」
「なんでちょっとけだるげなんだよ」
マットレスとシーツが擦れる音が聞こえなくなった頃合いで目を開くと、女の子はシーツを体に巻きつけていた。
たしかに大事な所は隠れたけれど、とんでもねぇ露出量なのは変わらない。
かといって、このまま会話をしないと、この女の子が何者なのかもわからない。

「よし、これで問題解決ですね。さてそれじゃマスターには失礼してパンツを脱いでいただくとしますか」
そう言って目の前の女の子はにっこりと笑い、俺のパンツに手をかけた。
「なんも解決してないぞ。なにその自然な感じ！　不審者なら不審者らしくいろよ」
俺の質問がピンときていないのか、なに言ってるんだと不思議そうな顔をする女の子。
「えっ不審者って、まだ私のことわかってないんですか？」
「当たり前だろ！　お前のことなんか知んねーよ。何者なんだよ」
自分で言うのもなんだけど、俺が異性と話すというのは、本当に少ない。
だからこそ目の前の女の子とは初対面だって分かる。
だが、俺がそう言った瞬間、目の前の女の子の大きな瞳から涙がこぼれた。
「ひどい……、ここに向かう前に、過去に戻って、私の身分を証明するもの用意しなくて良いんですかって聞いたら、『察しの良い俺ならお前のことわからないわけないだろ』って言ったのに！！！！！」
「いきなりわけわかんないこと言われても困るんだって。そもそも初対面だろ？」
「本当なんですって。ケルト神話のバイヴカハを少しもじったヴァイヴって厨二全開のネーミングが私の名前なんです」

「バカ言え。現在進行形で、謎の女が俺のパンツ脱がそうとしてるんだ。これだけでも通報ものだってのに。俺の作った人工知能のわけあるか。もう絶対通報してやる。だいたい、俺のネーミングセンスかっけーだろーが！」
「警察は……警察だけは勘弁してください」
それを止めるように、ヴァイヴと名乗る女の子は俺の腕にすがりついてくる。
「だったら、本当のこと言えよ、ほら自分は不審者ですって自己紹介しろ」
そう言うと、女の子は少し戸惑ったような顔をしながらこんな提案を申し出てきた。
「えっと、そうですね。じゃあマスターしか知らないであろう情報を私が知ってたら、未来から来たって認めてもらえますか？」
それだったら納得はできる。
イヴの学習を強化するために、ネットの検索をする時にわざわざイヴを経由させてる。
もし仮に、本当にイヴなんだとしたら、俺しか知らない情報も知っているはずだ。
「わかった。じゃあ俺の趣味を言ってみろ」
「えっ、趣味ですか……？」
俺がそう聞くと、目の前の女は見るからに困ったように眉毛をハの字にした。
『好きな食べ物』とか、『母親の旧姓』なんてありきたりな質問なら今の時代ネットでい

くらでも調べられる。
だったらもっと踏み込んだ質問をするべきだ。
視線を向けると、案の定、女も目を泳がせて戸惑ってる。
「ほらみたことか、答えられないだろ。もう警察に通報するからな」
「困っているのは質問の定義が広すぎるので答えられないだけですよ、でも……」
「『でも』って何だよ？」
「傾向なら簡単に答えられます。色で言うと黒、紫辺りがお好みのようですよね。種類でいうと紐の下着などが……」
「趣味ってそういう趣味じゃねーよ！」
下着の趣味を完璧に言い当てられ、怒りに打ち震えた俺は、思いの丈を爆発させた。
「だってマスターが言えって言ったんじゃないですか。それに下着の趣味が大人っぽくても、変態趣味でも私はマスター大好きですよ」
「フォローになってねーんだよ。大体なんで俺の下着の趣味知ってんだよ」
ここまで完璧な回答をされると俺の負けを認めるしかない。
恥ずかしさで頭を抱えるしかない俺に、イヴが優しく話し始めた。
「そりゃ私はマスターの作った人工知能に決まってるからじゃないですか。これで私のこ

と信じてもらえましたよね？　なんならもっと深い趣味を答えましょうか？」
　ネットにも書かないような自分の趣味を言い当てられ、もう認める以外の選択肢がなかった。
「認める、認めるからそれ以上俺の趣味を公にしないでくれ」
　部屋に侵入したのが変質者の類じゃなかったことは安心だけど、その代わりに大切ななにかを失ったような気がする。
「それは良かったです。では私がこの時代にきた経緯を聞いていただきます。その前に、まずは少し未来の話をしましょう」
　そう言ったイヴが親指と人差しを立てた両手をあわせてできた四角の面積を広げると、空中に青白く光るホログラムみたいな物が表示されていた。
「これ、ホログラム⁉」
「ホログラム如（ごと）きでそんなに驚かないでください。では始めます。遠くない未来では人工知能開発は技術的特異点（シンギュラリティ）を超え、ついに体を持った完全思考型の人工知能、エクスマギアが発明されました」
　ホログラムには男が一人壇上に立ち、ＡＣＭＥの新製品紹介みたいなプレゼンテーションをしていた。

「えくす……まぎあ？　それって、ようするにアンドロイドってことか」
「平たく言えばそうですね。アンドロイドと表現した方がわかりやすいですか？」
「いや、〝エクスマギア〟でいいよ」
「かしこまりました。では今後はエクスマギアで統一します。話を戻しますが、そのエクスマギアを世界で初めて作ったのが、マスターこと、御成博士になるのです」
「まじ⁉　じゃあこの壇上にいるのは俺？」
　えっ未来の俺すごくね。
　それにしても、エクスマギアって名前の響きがまず美しすぎる。
「そうですよ。そして、マスターが作り上げた最高傑作（マスターピース）こそが私になります。まっエクスマギアっていうのもいい年こいて、厨二全開のマスターが、機械仕掛けの神（デウス・エクス・マキナ）とラテン語の魔術の意味である所のマギア、そして歯車という意味のギアとをかけたダサい名前ですけどね」
「お前、本当に俺が作った人工知能なんだよな？　だったらもっと俺のネーミングセンスに敬意払えよ！　不満だったのかヴァイヴって名前！」
　名前の件はどうあれ、俺は未来でちゃんとイヴを作り上げたと思うと誇らしかった。
　ただ、そうだとすればいくつか疑問が残る。

「ん、でもちょっと待ってくれ。だったらなんでお前がこの時代に来るんだ？　そもそも俺を襲ってきたあの変態は……」

「その話もちゃんとしますからもう少し待ってください。その後マスターは私に使われている自分の技術を世界に公開しました。そして子供でも知っているような名だたる企業たちが、その技術を基に様々なエクスマギアを製作、人の生活は考えられないほど豊かになりました」

イヴが見せるホログラムには、エクスマギアが人間のサポートをする姿や、子守をする姿があった。

まさに俺が見たかった未来そのものだ。

「ですが、徐々に人類とエクスマギアに軋轢（あつれき）が発生し始めます。人類は会議で決まったはずのことを平気でひっくり返すんですよ。例えば、何か商品を作るとしましょう。会議では新商品はオレンジ色に染めると決めたはずなのに、オレンジ色に染まった商品を見て、『なんか違うんで、別バージョンも見たいです』とか『一旦確認するんでもう少し時間を』とか平気で言う人類にエクスマギアが怒って反乱を起こしたんです！」

「そんな理由で人類滅亡の危機になってんじゃねぇ！　なんだそのサラリーマンのあるあるみたいな理由は！」

なんとも情けない理由で、人類滅亡しかけてるなんて知りたくなかった。

「ほんとひどいですよね。週末に『月曜日にあればいいんで』とか言われても土日の休みがなくなるだけじゃないですか」

どうやら労働基準法は、人工知能には適用外らしい。

「怒ったエクスマギアは独自のニューラルネットワークを形成し、全ての男性の男性機能を奪うナノマシン『ＴＡＭＡＫＩＮ（タマキン）』を開発、人類への攻撃を開始します。私の予測演算だと十年後には人類は絶滅してしまうでしょう」

ホログラムを見ると、青い地球が、徐々に赤く染まっていく。

きっとナノマシンの攻撃で人類がやられていることを図解で説明してるんだろう。

「待て待て待て、そんな冗談みたいな理由で人類が絶滅するなんて信じられねーよ。ほんとにそんな理由で人類滅亡しちゃうのか……？」

俺の問いかけにイヴは少しだけ難しい顔をして何かを考えているような顔つきをした。

そしてしばらくの沈黙の後にその重い口を開く。

「すみませんマスター、実は実際の真実を告げるのに少し抵抗があったんです。本当のことを言います。ただ……、これはマスターに責任を感じていただきたくないです……」

そうだよな。そんなバカみたいな理由で世界が滅ぶわけがない。

人類の滅亡なんて出来事の理由は普通、大国間の戦争とか、食糧危機とか、でっかい隕石って相場は決まってるんだ。

でもだとしたら俺の責任ってなんなんだ？

「わかった。教えてくれ。人類が滅亡する理由ってやつを」

「未来のマスターは『なんで俺はチート能力がないんだ。トラックに轢かれて転生してぇ。転生して異世界でハーレム作りてぇ。親父、自動運転なんか作るなよ』と常日頃からおっしゃっておりまして、それがエクスマギアの暴走の引き金に……」

「おい、もっと冗談みてーな理由で人類滅亡してるじゃねーか。完全に拗らせてるじゃねーか未来の俺。なぁイヴ嘘だよな。嘘だって言ってくれ」

その反面、未来の俺の気持ちがなんとなくわかった。

多分、俺は美沙姫ちゃんに告白できなかったんだろう。

そうして拗れに拗れた俺は、もう戻れない領域に到達してしまったんだろう。

「いえ、残念ながら……」

「つまり、あれか？　俺が拗らせてるせいで、エクスマギアが暴走して、世界から男がいない世界になりかけてるってことなのか？」

「端的に、簡潔に、明瞭にお伝えしようとするとそうなります。そして暴走したナノマシ

ンが激化した結果、マスターまでもが攻撃対象になってしまったということですね」
俺は思わず膝から崩れ落ちた。
自分の将来に絶望したと言ってもいい。
「まじかよ……」
「そんなに落ち込まないでください。だから私が来たんですから。私の目的は大きくわけて三つ。一つはマスターのタマをエクスマギアから守ること。次に私の開発の基礎部分である人工知能を開発しきること。そして、なによりマスターが拗らせないように素敵な青春を送っていただくことです」
「ようするに俺の童貞を捨てさせるために未来から来たってこと？」
「平たくいえばそうです。この実験都市（ソリッドステート）で一番の種馬（スタリオン）として、悪名を轟（とどろ）かせていただければ私も人類も安心です。でもそんなに心配してないんですよ。だって男性って子作り好きですもんね」
「主語がデカイんだよ。男性蔑視だぞ」
「いいんですよ、この時代じゃ男性蔑視はいくらやっても許されるんですから」
ここまでの説明で理解したことは俺が童貞を拗らせて未来が大変になったって印象しかない。でもまぁイヴが味方ってのは理解できた。

「発言の節々に毒があるのはなんなんだ。とにかく事情はわかったよ。でもお前が来るのは納得できるが、俺がこの時代で襲われる理由ってなんなんだよ？」
「それは人類側のこの計画がエクスマギア側にも察知されたからです。マスターが青春を謳歌（おうか）すれば、童貞を拗らせることなく研究もろくにしないマスターであれば、自分たちは生まれない可能性が出てきてしまいますから」
時間をさかのぼって、親を殺したら、自分は生まれないので、親は殺せない。
親殺しのジレンマってやつか。
「なるほどな。ってことは俺を襲ったマッチョが刺客ってことになるんだよな……」
「そうですね。あの機体は土木工事などに特化したエクスマギア、ハードゲイナーです。そういえば日本では命の事をタマと言うらしいですから、二つの意味でマスターのタマが狙われてるってわけですね」
「うまいこと言ってんじゃねぇ。しかし、なんでよりにもよって睾丸（こうがん）なんだよ。いっそ命を狙われたかったよ」
世界で一番下品なダブルミーニングをイヴから聞きたくはなかった。
「じゃあこれからずっとそのハードなんちゃらみたいなのに襲われるってことだよな？それにお前が来たってことはあんなのがこの時代にいっぱいいるわけだろ？　いくらなん

でもお前一人じゃ俺守りきれないだろ」
「それは安心していいと思います。時間遡行装置、いわゆるタイムマシンっていうものはまだまだ実験段階で大質量の物を一気に送るなんてことできませんし正確な日時に遡行できるわけでもありません。そのせいでマスターを助けるのがギリギリになってしまったんですけど……。それに私が時間を遡行したら破壊するように爆弾しかけてきましたから大量にマスターのタマを狙う輩が押し寄せるなんてことはないので安心してください。それでなんですけど……マスター？」
咳払い一つした俺の方に向き直ったイヴが大きな瞳でじっと見つめてくる。
「な、なんだよ。そんな改まって」
「そんなの決まってるじゃないですか。好きな人いるんですか？」
火の玉みたいなストレートな質問に貫かれた俺は思わずむせた。
「ゴッホゴホ、はぁ？　なんでそんな話になるんだよ」
「いやだって、私、何のために来たかって聞いてましたよね。ってことは、必然的に好きな人の話になるじゃないですか。それで、マスターは好きな人いるんですか？」
「い、いるわけないだろ？」
言葉とは裏腹に、脳裏によぎったのは美沙姫ちゃんの顔だった。

だけど、俺ごときがこんなことを思うなんて、美沙姫ちゃんの側からしたら迷惑なんじゃないかなと思って、言い張れない自分がいる。
「じゃあ私が好きな人言ったら、マスターも好きな人言うっていうのはどうですか？」
「修学旅行の夜みたいなテンションやめろ。絶対俺は言わねーからな」
「この際ぶっちゃけましょうよ。さぁ恥ずかしがらずに！」
「恥ずかしいもんは恥ずかしいんだよ。もういいだろその話は、っていうか今までの話とお前が全裸で俺のパンツに手をかける繋がりが見つからないんだが？」
これ以上この話題が続けば、押しに弱い俺は間違いなく、白状せざるを得ない。
是が非でも言いたくなかった俺は話題を苦し紛れにすり替えた。
「あっ、えっと……それは服がタイムワープで焼けちゃったってのもあるんですが……」
冷静に考えれば、まず全裸な理由も納得しがたいけれど、もっと納得できないのはイヴが俺のパンツに手をかける理由だ。
「その～言いにくいんですが、時間遡行の影響で動力炉が壊れてしまったんですよ」
「たしかにパソコンとか装着型電子端末とかの故障は電源とか電池がぶっ壊れるってのはあるあるだからな」
イヴから聞かされた答えは随分とシンプルなものだった。

電化製品っていうのはエネルギーを供給する部分、つまり電源が一番壊れやすい。
装着型電子端末なら電池、パソコンなら電源。
「そうなんです。有機物を摂取することで基礎的な活動を行うだけのエネルギーは確保できなくはないですが、傷を癒やしたり、敵からマスターを守るためには余裕が必要なんです」
「だからってなんで俺のパンツに手をかけるんだ？　コンセントならそこら中にあるし、有機物ってことはようは食事すればなんとかなるんだろ？」
たしかに俺の部屋はものが散乱して、清潔とは言い難い。
そうは言ってもコンセントが見つけられないほどではないし、俺がベッドの上から見ただけでも使ってないコンセントの穴はすぐに見つかる。
それに食事がとりたいなら冷蔵庫になにかしらあるだろう。
そう言った俺に、イヴは首を振る。
「そもそも一般家庭の電圧では、私を動かすには不十分ですし、火災の原因にもなります。それに有機物を摂取して得られる電力も、根本的な解決には至りません。ですから、別の方法、性的刺激による充電、つまり絶頂充電です」
「絶頂充電⁉」

「そうです。私の発電機は足と足の間。鼠径部に肌を傷つけない柔らかさと摩擦を行うための硬さ、その両方を兼ね備え、長さが十センチから十五センチほどの棒を突っ込んでいただけると助かります。もっとわかりやすく、正確にお伝えするなら、マスターのオチンチッ！」
「ふざけんな、最後まで言わせねーぞ。なんだそのエロ漫画みたいな設定は！」
これ以上発言を許したら危ないと思った俺は、反射的にイヴの口を手で塞いだ。
「未来のマスターがそういう仕組みにしたんですから文句いわないでください。エッチな本を読みながら、『なるほど。悔しくても絶頂を感じると、電気が走るような鋭い快楽がくるのか……作者は女だって言うし、間違いないだろ。神は細部に宿るっていうし』って言ってました」
「快楽堕ちってのは、恥じらいが重要なんだよ。そんなエロ漫画の巨匠が言うようなことをなんで自分の発明に組み込んでんだよ。ちゃんとしてくれ未来の俺」
手を振り払ったイヴの目は真剣そのもの。
「それでは任務に支障が出てしまい、マスターの未来が……」
「おい、まさか俺の童貞捨てさせるために未来から来たってのはそういうことなのか⁉」
「いえ、マスターの遺伝子情報は一発……いえ一匹たりとも無駄にはできません。ですか

ら、寸止めでお願いします！」
「余計タチが悪いんだよ」
俺のパンツを下げようとするイヴ。
必死に引き上げる俺。
張力が限界までかかり、ギンギンに張り詰めたパンツの生地は裂ける寸前。
そんな危機的状況で、誰かが階段を登ってくる足音が聞こえた。
イヴという不審者が自分の家にいるってことを考えると、別の誰かの可能性もあるけれど、この足音は間違いなく妹だ。
「やばい、イヴ今すぐパンツから手をはなせ」
「い、いやでずよ、マスターがばなぢだらばなぢます！」
「犬とおもちゃ取り合ってるわけじゃねーんだぞ、妹が来るって言ってんだ」
こんなやり取りをしている間にも足音はどんどん近づいてくる。
俺は足を開いて、できたスペースにイヴの体を無理矢理押し込むと、布団をかぶせる。
俺は俺で、さも今起きました的な空気で上半身を起き上がらせた。
「ちょっとマスターいきなりなにするんでっ‼」
自分の股の辺りに人肌の感覚があるというのはなんともこそばゆい。

それに加えて、太ももになにかが触れている。
感覚が正しければ、手のひら以上に大きいスライムみたいな〝なにか〟だ。
「頼む、耐えてくれ……」
心頭滅却して、なんとか冷静を装えた俺の部屋のドアが勢いよく開き、立っていたのは白と紺のラインが入った同じ高校の女子制服。
黒を通り越して青黒い母親譲りのゆるいウェーブのかかった髪を、頭の高い位置でまとめたツインテールの妹が立っていた。
「ちょっとお兄ちゃん、今日の朝ご飯まだできてないんだけど‼」
「わ、わるい詩吹……。昨日夜更かししちゃって、寝坊しちまった……」
髪は母親の遺伝子が強くでたみたいだけど、目は親父に似たのか、目つきが鋭い。
その上怒ると、小言をねちねち俺に並べ立ててくるんだからたまったもんじゃない。
「夜ふかしなんていつもじゃん。パパもママも仕事で家いないから、家事は分担って決めたのに、お兄ちゃんがサボったら私が餓死しちゃうんだからね」
詩吹がドアを開けた勢いで、一階から何かが焦げた匂いが侵入してきた。
どうやら詩吹も、一応は料理にチャレンジしたみたいだ。
が、この匂いから察するに、失敗したんだろう。キッチンのシンクには焦げ付いたフラ

イパンが鎮座しているはずだ。
「だから悪いって言ってるだろ。今着替えて準備するから部屋出てけ」
「もういいよ、コンビニで済ますから。それでなにそれ？　どうしたの」
詩吹が指差したのは俺の下半身、もとい、イヴが詰まった掛け布団。
「あぁいや……これはその……なんか腫れちゃってさ」
腫れだとごまかすにはだいぶ無理がある。が、他にどう言えばいいのかもわからない。
「腫れちゃってって怪我したの？　ちょっと見せて？」
心配そうに詩吹は、俺に近寄ってくる。
「いや、やめろ、やめろ、やめてください、こっちに来るな」
俺が拒否しても、詩吹は止まってくれない。
今日ほど、家族の優しさが邪魔だと思った日はないだろう。
「なんでよ、怪我ならちゃんと手当てしないとダメでしょ」
そうして俺の目の前まで来た詩吹は俺の掛け布団を掴み、勢いよくはぎ取る。
そして当然布団の下には全裸のイヴ。二人が目を合わす。
「こ、こんにちは、イヴと申します」
「なっ……！！！」

イヴの元気の良い挨拶に言葉を失い、顔も真っ赤な詩吹。
小鳥のさえずりだけが部屋に響きわたった。
「お、お兄ちゃん？」
「は、はい……」
「私がお兄ちゃんの朝ご飯作ってる時に、なにしてたの？」
詩吹の表情は笑顔。が、目は一切笑っていない。
「い、いや違うんだ。違うんだよ」
「違うって……なにが？」
そうだよな。そりゃそうだ。服を着た俺と、全裸の見ず知らずの女の子。
思春期に、兄の情事を見てしまったと思い込んでいるんだ。そんな口調にもなる。
「な、なにを誤解しているか分からないけど、そういうやましい感じのアレじゃないからな？　なぁイヴ？」
「そうです。私はマスターの為に身を粉にして任務を全うしているだけです」
イヴは詩吹に向かって純粋な笑顔。
これが悪かった。イヴの言葉は詩吹の怒りの炎に火をつけた。
「マスター？　任務？　ほんとキモい！　学校で会っても絶対話しかけないで！」

「ち、ちがうんだ妹よ。話を聞いてくれ」
俺の制止も聞かず、乱暴にドアを閉めた詩吹。
あとに聞こえてくるのは階段を一気に下る荒々しい足音。
「詩吹様、怒らしちゃいましたね」
「改めて教えてくれなくてもわかってるよ。そういうのは死体蹴りっていうんだぞ？」
「かしこまりました。ですがマスターの家族のトラブルは想定済みです。後で私からちゃんと説明します。ところでマスター？　そろそろ時間がありません」
イヴの言葉に装着型電子端末を見ると、もう家をでなくちゃいけないような時間だ。
俺はいそいそとベッドから出ると、壁に掛かっていた制服に手をかけた。
「ちょっと、制服着るんですか？」
「お前が遅刻するって言ったんだろ？」
「はい、そうです。ですから急いで充電しないとって話ですよ！」
そういって俺の制服に手をかけるイヴ。
「お前、他に給電方法ないのかよ！　だいたい棒が必要なら、バナナとかでいいだろ」
「バナナの表面にはカビ菌がいるんです！　体の大部分が人間と変わらないとはいえ、中身は精密回路なんですよ？　バナナでもナスでもだめなんです！」

「挿入するものの種類の話なんかしてねぇよ」
イヴの体を払いのけ、距離をとろうと窓際に逃げるが、それでも手をワナワナと動かしにじり寄るイヴ。
「いいからマスターは私に充電するんです」
近づくイヴから少しでも離れようと、俺は広いベランダに飛び出した。
「それ以上近づいたら飛び降りて逃げるからな！」
「マスターがどこに行こうが私はついていきますよ、マスターは私を充電するんです」
「ホラー映画じゃねーんだからジリジリ近寄るな」
俺の背中がベランダの手すりにくっついた。
そういえば、俺昨日から追い詰められてばっかだな。
そんなことが頭をよぎった瞬間だった。
「御成く～ん」
透明度が高い湖みたいな透き通った声が俺を呼ぶ。
肩まで伸びた黒髪を揺らしながら手を振る女の子が一人。制服のブレザーを羽織り、襟元にピンクのリボン。スカートから伸びる長い足は黒のタイツ。
なにより、俺に笑いかけるあの顔を俺が忘れるわけがない。

「美沙姫ちゃん!?」
さて、今の俺はどんな状況か振り返ってみよう。
俺は半裸、イヴは全裸。
まともな高校生とはいえない状況を目撃した美沙姫ちゃんは、表情がどんどん曇ってく。
まるでなにか見てはいけないものを見てしまった。
そんな顔だった。
振ってくれていた手をすっと下げ、踵を返し、学校の方に向かっていく。
「み、美沙姫ちゃん……?」
背中に呼びかけても振り返ることもしてくれない。
「マスター……、マスターがどんなに変態と罵られようが、社会復帰不能だろうが、私には大切なマスターです。だから元気だしてください」
「イヴ……」
俺の悲しそうな表情を察してくれたのか、言ってくれた言葉が心に染みる。
腐っても俺の初めての友達だもんな。
俺の辛さや苦しみを理解してくれるんだ。
「なので、早く貸してください。棒を!」

「元気ってそっちの元気のことじゃねーだろ!」
友達なんて造るもんじゃない。

第二章　相思相Ａｉ

美沙姫ちゃんにイヴと裸でいる所を見られた俺は、部屋の隅で体育座りをして、顎を膝につけ、ただただ床の木目をなぞっていた。

「マスターいつまでも拗ねてないで学校行きましょ？　通学途中に食パンかじった転校生に、人間関係に悩むため息交じりの学級委員長。いつもはバカにしてくるけど、ふとした瞬間にいつもと違う一面をみせてくる部活の先輩。そんな夢色の学校生活が待ってるんですよ？」

「いねーよ。そんな娘いたら、童貞拗らせて世界も壊れないし、お前も来てないんだよ」

こんな悲しいことを自分の口から言わなきゃいけない俺の身にもなってほしい。

「だって未来のマスターいつも言ってましたよ。『あー俺も浴衣の女子高生と花火大会とか行って、甘酸っぱいファーストキスしてー』って。その為にはまず女子高生と知り合わないとダメじゃないですか」

「前途ある若者に、未来の自分はしょうもないですって告知するのやめろ」

そんな俺をなんとかして学校に行かせようと俺の腕をひっぱり動かそうとしてくるイヴ。

「なんでですか？　学校行きましょうよ。それとも宿題やってないから行きたくないんですか？　私も宿題手伝いますから、学校行きましょうよ」

「そんな小学生みたいな理由で休まねーよ」

たしかに宿題やってないから学校行きたくないってのはわかる。

変に目立つし、クラスメイトから笑われる危険があるからだ。

でも俺が今学校に行きたくないのはそういう理由じゃない。

美沙姫ちゃんに見られてはいけない場面を見られたからだ。

「ここまでして、行こうとしないということは……あっわかりました。マスター、あの方が好きなんですね」

これは完全に偏見だと思うけど、女の子って恋愛話に花が咲いたら止まらない。

それは幼稚園生だろうが、おばあちゃんだろうが、エクスマギアでもそれは共通らしい。

「べ、べ、別に美沙姫ちゃんのことは……。だいたい女子高生なんて、制服着てるだけで、俺は大人のお姉さんの方が……」

「たしかに、下着の趣味はそうかもしれませんが、その動揺っぷりは間違いありませんね。マスターは美沙姫様がお好きなんですね～」

ここまで他人に言語化されると、どうリアクションして良いのか困ってしまう。
「わ、笑わないのか？」
「なんでですか？」
イヴは不思議そうな顔で俺を見つめていた。
いや実際、俺もなんでこんなことを言ったのかわからない。
でも誰だって経験があるはずだ。
背伸びをすると誰かが笑う。
こっちは面白いことを言ったつもりもないのに笑う。
そんな笑いが俺は心底嫌いだ。
「いや、その……なんていうか不釣り合いじゃん。クラスのアイドルだしさ」
俺と美沙姫ちゃんじゃ身分が違う。
身分制度が撤廃されて久しい現代社会でも、クラス内カーストは絶対だ。
それを侵すということは、犯罪といっても過言じゃない。
だけどイヴはそんなことも全然気にしてないようだ。
「私はマスターのエクスマギアなんですよ？　もしマスターが今から空飛びたいなら羽になりましょう。泳ぎたいって言われたら浮き輪にだってなります。むしろマスターが頼っ

てくれるからこその私ですから」
そう言って俺に向かって満面の笑みって奴を向けるイヴを見ると、嬉しくもあり恥ずかしくもありって感じで、複雑だ。
「しかし泡野美沙姫様ですか。たしか学級番号三番、十二月二十四日生まれ、B型で学級委員長、バストは八じゅう……」
「ストップストップ！」
「マスターはすぐ私の発言を遮りますね、せっかく情報を確認してるっていうのに……」
「そうだよな、もしかして同姓同名の他人だったら俺が困るもんな……って違うよ！　なんでお前が美沙姫ちゃんのスリーサイズを数字まではっきりきっかり知ってんだ！」
「そりゃ今から私も学校に行きますから、クラスの女子の情報は把握しておかないと」
「学校に……行く……だと？」
「そうですよ。言いませんでしたっけ、これからずっとお守りしますって」
「いや確かにそうは聞いたよ？　でも学校までついてくるのか。ん、待てよ。そもそも入学してねーのに、学校なんて入れないだろ」
「それはこの『無法者の鍵』さえあれば余裕です」
そう言って、イヴが胸の谷間から取り出したのは、鍵のような形をしたものだった。

先端には端子がついていて、ぱっと見USBメモリみたいだ。
「これを電子機器にぶっさせば、セキュリティは突破できます。あとは情報を書き換えさえすれば私も今日から私立鶺鴒高校の二年生になれるってことですよ。まっこの時代のセキュリティなんてギャルの貞操観念ぐらいガバガバですしね」
「表現下手か。いちいち発言がセンシティブなんだよ」
語彙を増やすよりも、倫理観をちゃんと教えた方がいいなと実感した瞬間だった。
「とにかく、マスターが美沙姫様を好きなら、なおさら学校に行かなきゃダメです。人生の汚点は早めに処理しないと、人生のシミへと変化しますから」
「た、たしかにそうかもしれん」
イヴの言葉には説得力があった。
それにしても、拭き取らなきゃいけない人生の汚点が大きすぎる。
「だけど美沙姫ちゃんに会ったとして、なんて言えば良いんだよ」
「それは……」
さっきまで饒舌だったイヴの口が真一文字に閉まる。
「お、おい、まさかノープランってやつなのか？」
「そ、そんなことないですよ。私もずっと考えたんですよ。考えたんですけど……提案で

きるものがないんですよ」
「嘘だろ、美沙姫ちゃんとの関係がこじれたのはお前のせいなんだから責任をだな……」
「もちろん罪悪感はあるんですよ。あるんですけど、プランが思いつかないのは別問題なんですよ。えっと……あっ、ヤればデキるっていいますし、その場の勢いとテンションでごまかしましょう！」
「やればデキるの意味変わってんじゃねーか！」
イヴに聞いた俺がバカだった。
こうなったら美沙姫ちゃんへの説明も含めて、自分で考えるしかない。
そんな決意が俺の心に湧き上がる。
「俺、学校行くわ……」
「あっ本当ですか。それはよかった……。それでなんですけどマスター一人で登校出来ますか？　見ての通りなので……」
もはや見慣れすぎて違和感もなかったけど、今の今まで、イヴは全裸だ。
「わかった。ただ急いで準備して来いよ」
先に支度を済ませていた俺はイヴをベッドの上に残し、学校に向かった。

♂♂♂

見上げた空にはこの街の通信網を管理するドローンが何台も行き交い、道の隅では、清掃用のギアが、ゴミはないかと監視の目を光らせている。

そんな代わり映えのしない通学路で、美沙姫ちゃんへの言い訳を思いつくはずもなく大きくため息を一つつく俺。

俺の性格じゃ、まず美沙姫ちゃんと話すきっかけも作れないだろうし、このまま会話も一生訪れない可能性もあるっていうイヴの言い分も理解はできる。

とはいえ、会話の糸口も言い訳も思いつかない今の俺にはため息をつくぐらいしかできない。

親父の知り合いの女の子が家に急にやってきたとでも言えばいいのか？

それじゃ、ベランダで全裸のイヴと一緒にいる理由にならない。

ならいっそのこと、正直に事実を伝えるのはどうだろう。

俺の作った人工知能が未来から来て、充電に困ってたから、股間を貸したって？

それこそ、現実味がなさ過ぎて嘘だと思われる。

今の俺には、現実味があって、かつ全裸の女といたことが不自然じゃない――

そんな理由が必要だった。

「うーん……」

事実は小説より奇なりというが本当にそのとおりだ。

そんな答えの出ない議論に頭を悩ませながら、十字路を直進しようとした時だった。

何かが横断中の俺めがけて猛烈な勢いで向かってきているのに気づいた。

「ぬわっ‼」

情けない声を上げる俺に近づく何か。

よく見れば、同じ高校の女子用の制服を着ている。

うっすら赤い前髪が片目を隠しているせいなのか、視界も悪そうな女の子は何かから追われているらしく、必死な顔で俺の方に向かってくる。

なにより目をひくのは口いっぱいに頬張ったフランスパンがはみ出ていること。

いや、食パンならまだしもフランスパンってなんだよ。

「んもー、もー、もーもも、もーも！」

女の子は俺と目が合った瞬間、何かを訴えてくる。

が、何を言いたいかまるでわからない。

「どふぃて……どふぃて！」

女の子が必死になにかを訴えかけてくる。
正確な日本語は聞き取れないけれど、どいてと言っているような気がしないでもない。
更に女の子の背後には、もふもふという効果音がぴったりのコーギーが一匹。お尻をふりながら女の子を追いかけている。
俺と女の子の距離はどんどん近づいてくるけれど、俺の鈍い反射神経じゃ避けきれるわけもなく、あえなく衝突。
幸いぶつかった女の子が小柄だったからか、俺の体はよろける程度だったけど、ぶつかった女の子は衝撃で足がもつれ、綺麗なヘッドスライディング。
その拍子に口からはみ出たフランスパンはへし折れ、コマーシャルでも聞けないような焼きたてのパンが折れる音が辺りに響いた。
フランスパンに奪われていた俺の視線を女の子に戻せば、今度は目を覆いたくなるような事態が発生中。
地面に倒れた女の子のスカートが全開にめくれ上がり、淡い青と白のしましまパンツが丸見えだったからだ。
さらに最悪なことに、追いついたコーギーが女の子の腰に手足を乗せ腰を振っていた。
清々しい朝には重すぎる光景は地獄という言葉以外で表現できない。

俺が女子高生だったら、墓場まで持っていく級の経験だろう。
「たふけて～」
口に詰まったパンでくぐもった声が俺に必死に助けを求めてくる。
俺はおっかなびっくり犬の胴体を掴むと、ゆっくりと引き剝がした。
「ほら、お前、ダメだろ。こんな事しちゃ」
俺が出した手をペロペロとなめながら、人間大好きですと言わんばかりにはしゃぐもんだから女の子から引き剝がすのも一苦労だ。
なんとか犬を引き剝がし、女の子の方に目を向けると、女の子はころんだ勢いでスカートがめくれ上がり、しましまのパンツが丸見えのまま。
事実を伝えるか迷ったが、俺が迷えば迷うほど、この子はパンツを公衆の面前に晒し続けてしまう。
それはあまりにも不憫すぎるので、俺は声をかけた。
「そ、その……パンツ、見えてるぞ」
「ふぉっとなにみふぇるのよ、み、みふぁいで」
「わかんねーよ、パンでパンパンなんだよ口が」
俺の指摘によろけながらも立ち上がった女の子はなんとか口の中のパンを飲みこむと、

大きく深呼吸。
続けざまに決壊したダムみたいに喋り始めた。
「大丈夫じゃないわよ！　助けなさいよ！　いたいけな美少女のアナ様が凶暴な野犬に襲われてるのよ！　見なさいよ、この大きな口。人を殺す為に製造された生物兵器かなにかなのよ！」
さっきまで興奮していた犬は匂いを嗅ぐのに飽きたのか、女の子の足元で行儀良くお座りしていた。
かわいさで人が殺せるなら確かに生物兵器かもしれない。
「いやそれはないだろ。自分の足元見てみろよ。行儀よく座ってるぞ」
「えっ嘘、あっホントだ。か、かわいい～。って違うわよ。この駄犬はいたいけで超絶美少女であるアタシをいきなり追いかけてきたんだから死刑なの」
そういって腰に手をあて張り出した胸元のリボンは俺と同学年のピンク色。
制服のサイズが大きいのか、それとも体が小さいのか、手の甲の半分は袖で隠れていた。
なのに受ける印象は同い年というよりも年下の感じが強い。
細い眉毛も、筋の通った鼻も、輪郭もどこか幼い。
そんな印象の女の子だった。

なにより不思議なのは目の前の女の子を俺は知らないこと。
二年も学校に行けば、だいたいの人間のことは、名前まではわからなくても見覚えがあるはずだ。
なのに、この女の子だけは見たこともなければ、顔もわからない。
「んで、その超絶かわいい美少女がなんで、犬に追いかけられてたんだ？」
「それは……そのえっと、犬にパン自慢したら首輪が外れて……ってそんなことはどうでも良いでしょ。大体、アンタ何なのよ、しかもアタシのパンツ見たわよね？　変態なの？」
助けたのに、この言いよう。理不尽以外のなにものでもない。
「見たんじゃなくて見せられたんだ。それに俺はちゃんと心配しただろ」
「た、たしかにアタシのこと助けてくれたし……。でも、アタシが困ったからダメ！　今は時間がないから思いつかないけど、いつか責任とってもらうわ！」
「理不尽すぎるだろ、なんだよ責任って……」
そう言い残した女の子は名前も告げず走り去っていく。
残されたのはまだほのかに温かさの残るフランスパンの片割れ。
「パンも忘れてるし……。なんなんだよまったく」

独り言をつぶやきパンを眺めていると、誰かからの視線が背中にまとわりついた。
振り向くとそこには満面の笑みを浮かべるウチの夏制服を着たイヴが立っていた。
いや笑みというよりニヤついているっていうほうが正しい。
だがイヴの表情よりも、制服の着こなしの方が問題だ。
「おいイヴ、なんだよその格好？」
着ている夏制服のサイズが小さいのか、胸元の生地は張り裂けそうに膨張し、ヘソもちらりと顔を覗かせている。
「これは仕方がないので詩吹様のクローゼットにあった制服をお借りしました。しかしちょっと胸の辺りが苦しいですね」
詩吹のクローゼットから拝借した制服を着るのは致し方ない。
ただ、詩吹が着た時には膝より少し上の丈だったスカートが、サイズの都合上、太ももの半分より上の部分まで裾が来ており目のやり場に困る。
きっとウチの風紀委員がイヴの姿を見たら卒倒するだろう。
「……詩吹にはちゃんとお前から説明しろよ？　服の件も含めて全部」
「はい、それはもちろんです。それよりもマスター、隅に置けないですね」
「な、なんのことだ？」

「すっとぼけないでください。未来のマスターはいつも『出会いなんてそんな簡単にあったら苦労しない。童貞なめんな』って嘆いてましたけど、ちゃんと出会いあったんじゃないですか」
「出会い？　俺が少しでも嬉しそうに見えたか？　苦手なんだよああいう感じでめちゃくちゃ喋る人。なんか一喋ったら、十返されて会話が成立しなさそうじゃん」
「恋はギャップです。映画でも最悪の出会いから恋に発展なんてよくある話ですからね」
「創作物と現実を一緒にすんじゃねー。そもそも一度も会ったことのない女だぞ」
俺の一言にイヴはただでさえ大きい目をさらに見開いた。
「マスターあの子とお知り合いじゃないんですか⁉　ということは転校生。パン転校生と曲がり角でぶつかるなんて……運命……！　マスター、あの子と子作りしましょう」
「だから表現が下品なんだよ。もっとなんかあるだろ！　そもそも、その『マスター』って呼び方どうにかなんねーのかよ」
「未来のマスターが『マスターって呼べ』っていうから呼んでるんですよ……。お好みではないのならもっと感情抑えた感じで接することもできますが、どうしますか？」
「人工知能っぽくってどんなだよ」
「そうですね……、V・I・V・E（ヴァイヴ）……起動確認。これよりスタートアッププログラムを

開始します。警護対象の遅刻を確認、移送を開始します」
イヴは事務的に喋ってから、俺をお姫様抱っこすると、走り出した。
「違う。そういうことじゃない。そういうゲームの中の人工知能キャラ的な喋り方をしてほしいわけじゃない！　お姫様抱っこはやめろ！」
俺はろくに言い訳も作れぬまま、イヴに抱かれ学校へ向かうのだった。

♂♂♂

「到着～♪、タイムは十五分三十二秒。世界新記録です」
「初めて行く学校に世界新記録もくそもあるか！　いくら遅刻しそうとはいえ、こんなところ誰かに見られたらどうすんだ、早く降ろせ」
イヴは俺をお姫様抱っこで通学路をかけ抜けて、なんとか遅刻ギリギリで校門に到着。
ただ周囲に高校生はゼロ。
もともとこの街自体が引っ越すのに選考を経ているってのもあるんだろうけど、真面目な生徒が多いし、遅刻する生徒の方が珍しいんだよね。
「それでは私は職員室に行って、書類の不備やらなんちゃらかんちゃら適当に理由をつけて転校を正当化してくるんで、マスターは教室で待っててくださいね」

「絶対変なことすんなよ、絶対だぞ」
「もちろんですよ」
俺の念押しも聞いているのかわからないイヴは校舎へと向かって行ってしまった。
しかし、この状況どうすりゃいいんだ。
多分だけど、美沙姫ちゃんは俺を誤解しているし、良い言い訳も結局思いつかないまま学校に到着してしまった。
とはいっても、ホームルームが始まるまでには教室に行かないと、ドアを開けた瞬間にクラスメイトの視線を一気に集めて変に注目されるはめになる。
覚悟を決め、靴を履き替えた俺は、小走りで自分の教室に向かった。
無事到着すると、教室は昨日のテレビ番組や動画サイトに上がった動画なんかの話題が飛び交っている。
扉を開け騒がしい教室に入ると、クラスの全員が一斉に俺の開けたドアの音に反応して静まりかえった。
俺が担任じゃないことが分かると、舌打ちや『なんだお前か』っていう無言の圧力。
ちょっと遅れたぐらいで舌打ちされるのは辛いが、耐えるしかない。いつの時代もカースト最下層の人間は訴える権利がないんだ。

不平や不満を誰に打ち明けるでもなく椅子に腰掛け、下を向いて大きく一息。
ようやく呼吸が整った俺が誰かの視線にさされているような感覚に顔を上げると、同級生と談笑中の美沙姫ちゃんが一瞬こちらを見ていたような気がする。
本当だったら、今すぐ釈明をしにいかないといけないんだろうが、会話に割り込んでまでやる程の度胸はない。
かといって、このまま見ているだけじゃなにも進展はしない。
そんな泥濘に足を取られ身動きの取れない思考のループの最中に、教室のドアの開く音と共に担任の声が響いた。
「それじゃみんな席に着いて～」
黒縁のめがねの奥には鋭い視線、黒のタイトなスーツとストライプのシャツ。
漫画の中の女教師がそのまま現実に飛び出してきたような外見とは裏腹に、面倒見もよく、生徒の中では人気みたいだ。
ただ、たまに見せる鋭い視線が、妹を彷彿とさせておっかないっていうのが俺の印象だ。
「えぇ、随分と急な話で私も知らなかったんだけど、今日から転校生が来ます」
担任も怪訝そうな顔をしながら話している。
そうでしょうとも。

なんせ転校がきまったのはだいたい三十分前ですからね。
「マジかよ、美海せんせー、女の子すか、男すか？」
「近藤先生どんな人なの～？」
当然クラスも突然の知らせにざわつき、クラスのお調子者担当がクラスの声を代弁する。
そら、こんな中途半端な時期に、転校生が来るなんて誰も予想しなかっただろう。
なにも知らない俺だったら同じようなリアクションをしてたはずだ。
だけど、転校生が来ることは既に知っている。ついでに言えば、その転校生は銀髪のでっかいポニーテールを揺らして、パツパツの夏服を着ているのも知っている。
驚きも無ければ、ワクワクも無い。
「はい、良いから静かにしてください。じゃあ時間もないから入ってきて」
担任が促すと、ドアが開き、案の定でっかいポニーテールを揺らし、ついでにパツパツの夏服を着たイヴが教室に入ってきた。
と同時にざわつく教室。
「めっちゃ可愛くね？」
「胸でかっ。身長も高いし……」
「えっあの子の制服やばくない？　ヘソ見えてるんだけど」

誰かがイヴの外見について、とやかく言っている。
確かに、ブラウスの第二ボタンははじけ飛ぶ寸前だし、ヘソも丸出しだけど、俺からするとなんとも複雑だ。
きっと自分の娘に彼氏が出来たらこんな気持ちなんだろう。
「はい、どうも～、本日付けで鶺鴒高校に転校してきました。御成イヴです。みんなイヴって気軽に呼んでください」
イヴが自己紹介を終えると、さっきとは違うざわめき。
「お、御成？」
「御成くんと関係あるのかな」
「御成ってあのパソコンオタクだよな？」
イヴの自己紹介が終わると、ひそひそとそんな声が聞こえてくる。
そりゃ御成なんて名字のやつを俺は今まで見たことがない。
偶然珍しい名字のやつがクラスに二人いるなんてありえない。
ということは必然的に俺の血縁者だって思われる方が自然だ。
ただ、俺は有象無象のクラスメイトのリアクションより大事なことが気になっていた。
美沙姫ちゃんのリアクションだ。

恐る恐る、美沙姫ちゃんに視線を動かすと、目を見開き、口をポカンと開けていた。
「イヴさんは御成くんの遠縁の親戚で海外から日本に引っ越してきたので、文化の違いなどはきちんと理解をして助けてあげてください。さて挨拶も済んだことだし、さっさとホームルームを始めたいんだけど……もう一人転校生がいます、続けてアンナさ～ん」
どうやらイヴは海外から来た俺の親戚ってことになったらしい。
確かに、日本のどこかから来るよりも、海外から来たほうが、変に詮索されないだろうから良い設定だと思う。
しかしイヴの他に、転校生が来るのは驚きだ。
もちろん俺以外のクラスメイトも同じようで、担任の声にざわついている。
そんな教室に担任が招き入れる声と同時にドアが開き、教室に入ってきたのは、俺が通学路で会った顔をハムスターみたいに膨らませたあの子だった。
「それじゃ、アンナさんも挨拶してもらえるかな？」
担任に促されたその子はひとつ頷いてから話し出す。
「あ、あの……、今日転校してきた蜂鳥アンナ……っていいます。アンナでもアナでも好きに呼んでくだ……あっ、さっきの変態！」
自己紹介を言い終える前に俺を指差し、学校では言っちゃいけない単語をほのめかす。

次の瞬間、クラスの空気は極限にまで冷え、レーザーのような視線が俺に降り注いだ。
これにはさすがの担任もまずいと思ったのか口を開く。
「あ～、えっと、お、御成くんともう知り合いなのかな？」
アナって女の子は小さく頷いた。
「そうか、ならちょうど良い。御成くん、これも何かの縁です。時間も無いし二人の机と椅子が足りないから、今から一緒に空き教室にとりに行ってくれないかな」
担任の顔には、もうこれ以上面倒事は勘弁してほしいという言葉が書いてあった。
島流し、トカゲのしっぽ切り。
そんな言葉が脳裏をよぎる。
「は、はい。わかりました」
とはいえ、従わないわけにもいかない。
意図を汲んだ俺が立ち上がると、皆の視線が俺を追う。
一秒でも早くその空間から離れたかった俺は、足早に二人を引き連れ、教室を後にした。
廊下に出れば、他のクラスも朝のホームルーム中のようで生徒は俺たちだけ。
空き教室に向かう廊下に響くのは、ホームルームで教師が喋る声と、俺についてくる転校生二人の足音だけ。

静かすぎるってことはないけれど、それでも重い空気が俺たちの間に流れているのは間違いない。

とはいえ、変態と名指しされた奴と俺が作った人工知能に配慮する義理もない。

そんなことを考え無言を貫いていると、イヴが俺の肩を叩く。

「ちょっとマスター、なにか話しかけてあげてくださいよ」

「話すってなにをだ。お前も聞いてただろ？　ただでさえ美沙姫ちゃんに変なところみせたんだぞ。その上、今度は転校生に開口一番、変態って言われたんだぞ？　仲良くしたら、美沙姫ちゃんとの仲直りなんて……」

「確かにそうなんですが、このまま無言ってのも不自然です。いっそ変態というアドバンテージを生かして、この転校生を好きな人に変えてみるのも」

「『変態』を身長が高いとか、勉強ができると同じ舞台にあげるな。そもそも簡単に好きな人を変えるとか最低だろ」

あっあの娘かわいいから好き。

あっこの娘、俺に優しくしてくれたから好き。

そんな調子じゃ、もし仮に美沙姫ちゃんに告白しても、『毎回、この人適当な事言ってるから、私も適当に対応しよう』と思われてそれこそ終わりだ。

「確かにそうかもですが、邪険に扱うのも違う気がします。それにあの子の状況を考えてください。転校してきたばかり、そして周りには知らない人しかいない。きっと心細さの裏返しでマスターを変態呼ばわりしちゃったんですよ」

「それでもだろ。心細かったらなに言ってもいいわけじゃないんだぞ」

「そう言われればそうなんですけど……」

少し心配そうに二人目の転校生を見るイヴの言っていることがわからない俺でもなかった。

というのも俺も詩吹もこの実験都市に来るまで転校の連続だったからだ。

両親は現在進行形で優秀なエンジニア。

今はどの車にも搭載してる、勝手に運転してくれるプログラムを作ったのも両親だし、アメリカの有名雑誌で世界を変えたエンジニアとして特集も組まれ、表紙も飾った。

ただ優秀なエンジニアってのはヘッドハンティングなんてことは日常茶飯事。

職場もコロコロ変わるし、同じ場所に定住するほうが珍しい。

実際、実験都市って街に引っ越すって話を両親から聞かされた時も、俺も詩吹もまたかという反応しかしなかった記憶がある。

引っ越す度に、リセットされる人間関係。

二人の兄妹は、真反対の考え方に進んだ。
詩吹は新しい場所でもすぐに友達を作ろうと明るい性格に。
俺はどうせリセットするなら人間関係を作らなくてもいいやと根暗に。
その上、装着型電子端末があればなんでもできる時代に、パソコンでなにかを打ち込んでるんだから、時代遅れの根暗なパソコンオタクとして話しかけられもしない。
そんな根暗な俺が美沙姫ちゃんと出会ったのはこの街の中学の時だ。
当時、俺は、優勝したら百万円の人工知能製作のコンテストを控えており、寝る間も惜しんで、イヴの雛形を作っていた。
家にいると集中できないってこともあり、放課後の誰もいない教室でパソコンを開き作業をしていると美沙姫ちゃんが画面を覗き込んできた。
イヴがうまく動かないことに苛立っていた俺は誰かに話を聞いてもらいたかった。
そこに現れた美沙姫ちゃんは俺にとって渡りに船。
知らないはずのプログラム言語のことや、人工知能の凄さ、ひいてはテクノロジーの進化が映画みたいな世界を作っていくんだと、オチもないような話を続ける俺を、美沙姫ちゃんはにこにこ笑いながら褒めてくれた。
それからは少しは他人とコミュニケーションを取ろうかなという気持ちになってきた。

このアナってヤツもそうかも知れない。
「……そうだな。イヴの言う通りかもしれん……。でもどんな会話すればいいんだ？」
「あっほんとですか、マスターやさし～。そうですね……。こういう時の話題は何でも良いと思いますよ。自信満々で話しかければ大抵相手は納得してくれますから。大事なのは〝自信〟です」
「自信って言われてもな……」
「なんでも良いんですって。この本に書いてありましたから」
そう言ったイヴは一冊の本を取り出した。
表紙には『はじめての恋のはじめかた』とデカデカと書いてある。ピンク文字に金で縁取りされたデザインは、いかにも小学生高学年女子が好きそうなデザインだ。
「一気に信憑性がなくなったんだが」
「いやマスターそんなことないです。だって詩吹様の部屋で発見したんですよ。これによれば、会話のきっかけなんてなんでもいいって言ってます。内容から察するに恋のマニュアルみたいですね」
イヴが手にした本の奥付で発行日を確認すると、発行日は一ヶ月前。
なんつーもんを高校生にもなって読んでんだよ妹よ……。

「それは小学校高学年の女子用にカスタマイズされた恋愛指南書だろうが」
「恋に年齢なんて関係ありません」
間違ってないんだけど……、間違ってるんだよ。
俺とイヴが小声であーでもない、こーでもないと話している最中だった。
「ねぇ……ねぇ……ちょっと」
声と一緒に俺の腕を引っ張ってきたのは転校生だった。
妙に眉毛がつり上がり、俺を呼ぶ声のトーンやら表情はみるからに怒っている。
「マスター、私が職員室いってる間になにかしたんですか？　それともいやらしい目つきで見てたんですか？　やっぱり変態だったんですか？」
「またってなんだよ。前科ありみたいな言い方やめろ」
「ならいいんです。むしろチャンスです。会話しましょう」
イヴの勧めに俺は頷き、会話のキャッチボールを試みる。
「ど、どうした？」
「確かにアタシは、キュートかもしれないけど、チラチラ見られたら気になるわ」
どうやら転校生は俺たちがちらちら見ていたことにご立腹らしい。
俺はすぐにイヴに振り返ると、うなずいて会話をすすめろと合図してくる。

「わ、悪いな転校生。別に不快にさせるつもりはなかったんだけど」
「転校生じゃなくて、アタシの名前はアンナよ。まっアタシが高貴すぎて、呼び捨てできないっていうなら様づけでもいいわよ。えっと……御成だっけ？　たしか先生がそう呼んでたものね」
外見はおとなしそうな女の子だが、しゃべり方といい、勝ち誇る態度といい、性格は生意気そのものだ。
そもそも転校一日目で『様』付けを要求してくるってどういう家庭環境で育ったんだよ。
失礼な態度に文句の一つも言いたくなったが、ぐっと堪えた俺はこう返す。
「んで、そのアナが俺になにか用か？　なんか見た感じ怒ってるけど、早く机とりに行かないと一時間目に間に合わなくなるんだけど？」
異性を呼び捨てっていうのは抵抗があるけど、礼を欠いた相手なら別に問題ないだろう。
「あれ、えっ、授業遅れるの？　それは困る……。って違うわよ。あんた、さっきアタシのパンツ見たでしょ。どういうつもり！」
アナの言葉に俺は思わず頭を抱えた。
確かに俺はこの子のパンツを見た。
けど一言一句、正確に言えば、見たんじゃなくて見せられた。

もっと忠実に日本語で表現するなら目の前でアナが勝手にこけて、勝手にパンツを見せられただけ。

それで罪に問われるなら日本の司法は崩壊だ。

俺が頭を抱えていると、アナの言葉にイヴが反応。

「えぇ！　マスター、この娘のパンツ見たんですか？」

「あれは見たというか、見せられたというか……。とにかく、悪意もなければ、故意でもない。というかイヴ、お前が入ってくると会話がこじれるから入ってくるな」

「いいえ、見過ごせません。マスターがこんな幼い系が好きだったなんて、それじゃ小児性愛者じゃないですか。マスター、小児性愛は日本の法律でも犯罪です。なにより表現の自由を盾にロリイラストを描いても、今度は表現の自由を盾に知らないやつから殴られるんですよ。そんな一方的に殴られるだけの性癖なんて損なだけじゃないですか」

「性癖ってのは〝在り方〟なんだよ。なにかにつけて政治的な正しさとかよく分からん尺度で他人の性癖どうこう言い過ぎなんだよ。社会正義に託けて自分の見たくない物消してやろうってマインドがむかつくんだよ。自分個人が嫌いなだけだろーが。そもそも『嫌い』って言わずに『自分向きじゃない』って言え。チクチク言葉は許さんからな」

俺とイヴのやりとりを見ていたアナは、大きなため息を一つ。

それから俺をまるでかわいそうな生き物のように見下しながら話しはじめた。

「まぁアタシがプリティだから興奮するのもしかたないわね。巨乳は馬鹿って言うし」

それに対してイヴがキレた。

「確かにそういう体型を好きな方も居ますが、貴女のような体型は〝幼児〟体型って言うんですよ？　幼児はかわいいですが、それはあくまで動物的かわいさ。そもそも生き物として生殖能力の無い人間に興奮するなんて、理屈で言えば妊婦に興奮するのと同じです。マスターもそう思いませんか？」

「うるせぇ、俺をいちいち巻き込むな。だいたいどこでお前ら張り合ってんだ」

そこは「マスターはそんなスケベな男じゃありません」とかフォローする所だろうが。

なによりイヴ、無意識に色んな人を刺すのはやめろ。

そしてここは、健全な青少年が学ぶ学校だぞ。

「なっ⁉　し、失礼よ。たしかに身長はちっちゃいかもだけどアタシの胸は平たくないもん。ほら！」

そう言って、アナはアナで襟のボタンを外して、谷間を見せつけてくる。

ちらりと見えるブラジャーはパンツとおそろいみたいで、青と白の縞模様。

ってそんな冷静に観察してる場合か、俺。

顔を慌てて手で覆った俺は、すかさずこう言った。
「な、なにしてんだよ。女の子がそう簡単に肌を晒すな。なぁイヴ、お前も止めてくれ」
「そっちが谷間なら、私が尻を出せば五分なのでは？　ねぇそうですよねマスター？」
そう言って、イヴの方から、なにかを捲る衣擦れのような音が聞こえる。
俺は手で顔を覆ってて、なにもできず、前も見えない。
けど、間違いなく、イヴはスカートを捲っている。
「五分でもなんでもねーよ。むしろここにいる全員が敗者だよ。おいイヴなんでそういうことしちゃうんだよ」
「なんでなんでしょう。なぜか負けられない気持ちが心の底からわいてくるんです」
「ウケてる芸人舞台袖で見てるんじゃねーんだぞ。もうやめてくれ。それにアナもブラウスグイってやるな。丸見えなんだよ下着が」
なんとかイヴを落ち着かせ、スカートを捲るのをやめさせると、今度はアナの悲鳴。
「し、下着見られた！　エッチ！　馬鹿！　それ相応の責任は取ってもらうわよ」
「責任ってなんだよ。パンツはまだしもブラジャーは完全に自分からだったじゃねーか」
「う、うるさいわよ。責任とって、もうアタシと付き合いなさい」
「だからこうして机取るのに付き合ってるだろ？　これ以上何に付き合えばいいんだよ」

「ち、違う、そ、その……えっと……男の子と女の子のそのえっと……！　あぁもう……とにかく大事なところを見られてしまったからには今日からアタシとあんたはカップルだから！」
なにを言い出すかと思えば、俺と付き合うだと。ふざけるな俺の童貞は美沙姫ちゃんに捧げるんだ。
「なにが責任だ。そういうのは無計画で学生のうちに彼女妊娠させたアホに言う台詞だ」
「に、妊娠⁉　下着を見られたら妊娠するの？　アタシのこと妊娠させたの⁉」
「するわけねーだろ。下着見られて妊娠するなら、日本も少子化で困ってねーよ」
俺の否定に、驚いたアナは口をパクパクとさせてまるで鯉みたいだ。
だけど俺には心に決めた人がいるんだ。
こんな訳の分からん奴に純潔なんか捧げるもんか。
「だいたいどこの世界に、下着見られたら付き合う義務があるなんて書いてあるんだよ」
俺の疑問にアナは一冊の本をとりだした。
「ち、ちゃんとこの本に書いてあったから……」
見せられたのは、ピンクの文字に金の縁取りがされたタイトルが書かれた本だった。
そう、『はじめての恋のはじめかた』だ。

「またその本かよ！　この辺の女はそれ読まないと死ぬ病気にでもかかってんのか。もうつきあってられん。イヴからもなんか言ってくれ」

よく知りもしない女をとっかえひっかえなんてするような男とは俺は違う。

ちゃんと心に決めた人がいるんだ。

「もういっそのことこの娘と付き合う選択肢を選んでもいいんじゃないでしょうか」

「なんでそうなるんだよ⁉　お前、俺との今までの会話覚えてるよな？」

「だからこそです。いいですかマスター？　富める者はますます富み、貧しき者はますます貧しくなるってやつですよ」

「なんだ聖書の引用か？」

「そうじゃありません。いいですか、世の中のチャラ男はなぜモテ続けるのかって話ですよ。経験がある人間だけがより多くの経験値を得るのが社会なんです。だいたいラノベの主人公なんて、ヒロイン見つけちゃ寸止めオナニーし続けるクズ野郎ばっかなんだから、マスターもクズになりましょう」

「なんだその言い方、ラノベに親でも殺されたのか！　そんな方向に進むなら俺はずっと純潔を守り切るからな」

そう俺は断言した。

だけど力が入りすぎて、アナにまで聞こえてしまっていたようだ。

少しだけ悲しそうな顔で、こっちを見つめるアナ。

さすがの俺も罪悪感が湧いてくる。

「アタシが可愛すぎるから……一緒に並んだときに辛いから遠慮してるんでしょ。そんなの御成は気にしなくていいんだからね？」

前言撤回。やっぱこいつムカつくわ。

「しれっと彼女みたいな立ち振る舞いすんな。いいから机と椅子もって教室戻るぞ」

俺が早歩きで空き教室まで進み始めると、二人もトボトボと何やら言い合いしながらついてくる。

「世界最強はゾウに決まってます」

「ゾウ⁉　ゾウなんて鼻長いだけじゃない。サメの方がかっこいいし強いんだから」

「サバンナでもそんなこと言えるんですか？　あの巨体で時速四十キロで走るんですよ」

「サメだって、泳ぎが得意でしかも速いんだから？　そんなこともしらないの～？」

「たしかに速いかもしれませんが、サメは陸に上がったら泳げないじゃないですか」

「だったらゾウだって泳げないでしょ。あーあ海で溺れちゃうゾウかわいそう」

「お言葉ですが、ゾウは泳げます！　最強はゾウで決定です」

どういう流れでそんな話題になったのかはわからないけれど、最強の動物についての熱いディスカッションが繰り広げられていた。

ようやく空き教室についたと思っても、会話の決着はついていなかった。けれど、下手に会話に口を挟めばこっちに火の粉が飛んできそうだ。

俺は我関せずと心に決め、机と椅子をそれぞれに渡すと踵を返して自分の教室へと向かう。

もちろんその帰りも、なんだか口喧嘩していたけど、これ以上、脳の容量の無駄遣いはしたくない。

雑音として、二人の会話を処理しながら教室にもどってこれた。

ちょうどホームルームも終わったようで、部屋の中は同級生の雑談で溢れていた。

「じゃあ俺は、案内したから、あとは適当にやってくれ」

そう言って教師からの任務を全うした俺が自分の席に戻ろうとすると、イヴが呼び止めた。

「待ってくださいマスター、私たちどこに座ればいいんでしょうか？」

たしかに机と椅子もってこいとは言われたけど、細かい部分までは聞いてない。

それに、このクラスもつい二週間前に席替えしたばっかりだ。

言葉に詰まった俺は少し考えてからこう言った。

「どこでもいいんじゃないか？　視力が悪いとかなら前の方が良いだろうし……」

ちょうどいいことにウチのクラスは他のクラスより少し人数が少ない。

だから二人も転校生が来たってことにはなるんだけどな。

「どこでもって……見たところマスターの隣の席は誰も使ってないんですか？　だったら私はマスターの隣がいいです」

イヴが指さしたのは俺の席の右隣。

「あぁここの席は多分駄目だと思う。一応使ってる人間いるんだけど、その本人が学校こないんだよね」

なんでも学校公認でサボりオッケーになるほど、優秀らしく。テストだけ受けに来る。

普通の学生である俺からしたら羨ましいことこの上ない。

まっこれも一つの個性ってことなんだろうけどな。

俺が隣の席から、二人に目を戻すと、相も変わらずしょうもない喧嘩。

「だったら、そこの席はアタシが座る。ゾウが好きなんだから、前の方に座りなさいよ。アタシは御成の隣にすわるから」

「どういう理屈ですか！　そもそも、貴女のその身長で教室の後方なんて座ったら、先生

の書いたことみえないんじゃないですか～？」
目には目を、歯に歯を。嫌味には嫌味を。
そんなプログラムを俺はした覚えはないけれど、イヴの方が一枚上手だ。
「あぁもう喧嘩すんな喧嘩。とにかくどこでも良いから適当に座ってくれ」
イヴとアナが言い合いをしていると、周囲からクラスメイトがどこからか湧きだして、俺を含めた三人を中心に円ができた。
「部活入る気ない？　ウチ部員すくなくてさー」
「入るならウチの部活にしてよ～」
それはもうすごい視線が俺達に集まって、日陰者の俺には耐えられなかった。
イヴはと言えば、持ち前の明るさで適当に返事をしつつクラスメイトと談笑中。
「じゃああとは適当に過ごしてくれ」
はいはいすいません。脇役は退きますので、どうぞこころゆくまで転校生たちとの会話をお楽しみください。
そんな捨て台詞を心の中で吐いてから、いざ自分の席に戻ろうとすると、誰かが俺の制服を後ろから引っ張った。
振り向くと、アナが俺のシャツを引っ張っている。

「アナさん？　服……離して欲しいんだけど……」
俺としては一秒でも早く自分の席に戻りたいんだ。
それにこれ以上の面倒ごとはなんとしてでも避けたい。
「い、行かないでよ」
「なんでだよ、別にもう俺に用事はないだろ？　別に人見知りって訳じゃないだろうし」
「このアタシがひ、人見知りなわけないじゃない！　それにアタシと一緒にいたほうがなにかと良いでしょ！」
俺を見上げたアナはそう言って、俺の陰に隠れるように後ろに下がるとうつむいた。
なに？　恥ずかしいの？
さっきまでのパンツ見られたから付き合えと言っていた君はどこに行ったの？
男子から、『おめーだけなんで転校生と仲良くしてんだよ』的な視線が痛かった……。

♂♂♂

なんとか午前中の授業を終えたクラスメイトが食堂に出払っている人気のない教室で俺は机に突っ伏していた。
なぜこんな疲労困憊なのかと言えば、休み時間の度に起こるボケナスの人工知能と転校

生の喧嘩が原因だ。
アナがイヴにしょうもない喧嘩を売り、正論で返され、俺に泣きつく。
しかもその喧嘩も、目玉焼きにはなにをかけるのが正しいか、とか、アボガドかアボカドかとかその手の箸にも棒にもかからないようなくだらない内容ばかり。
普通転校生ってのは転校から一週間はおとなしくしてるもんだろ。
なのに、あいつらときたら常に何かしらの言い合いしてるもんだから仲裁する俺の負担は尋常じゃない。
結果として俺の精神はごりごりと摩耗している。
ただ、そんな狂宴も昼休みの間はないようだ。
なんでも書類の記入漏れがあったらしく、二人とも担任に呼び出しを食らっている。
今頃、担任は俺の代わりに二人の喧嘩を仲裁しているんだろう。
不憫だとは思うけど、少しでも体を休めたかった俺はこうして額を机にくっつけて机の木目をなぞりながらぼーっとしてるってわけだ。
そもそも流れで、転校生二人の面倒を俺が見ることになってるけど、こういうのはクラスの陰キャがやるようなことじゃないんだよ。
そんなこともあってか、依然として俺は美沙姫ちゃんと話せずにいた。

「あぁなんて話しかければいいんだよー」
なんて言い訳すれば、美沙姫ちゃんは納得してくれるんだ。
俺が頭を悩ましていると誰かがポンポンと肩を叩くから、重い頭を上げると、そこに立っていたのは美沙姫ちゃんだった。
「み、みさ……泡野さん!?」
黒髪をなびかせ、高校のパンフレットみたいに綺麗に制服を着こなした美沙姫ちゃんだった。
俺はまさか美沙姫ちゃんが立っているとは思わず、声が裏返った。
ついでにいうと、陰で名前で呼んでるっていうのがバレたかもしれない。
そう思うと今すぐにでもベランダから身を投げ出したい。
「美沙姫でいいのに。あ、ほら別に尋くんだけってわけじゃなくて、友達もみんなそう呼んでるし……」
「友達か……そう……だよね。うん」
「だって私達中学からの付き合いだよ？　そんなこと気にしなくていいのに。そりゃ知らない人に呼び捨てされたら、ちょっと怖いけど、だけど尋くんなら気にしないよ」
「こ、今度からそうするよ」

案の定、俺の気にしているところを的確にケアしてくる。
もしかしたら美沙姫ちゃんは人の思考を読める系の人なのかもしれない。
ただ、この後の会話がまるで続かない。
それは美沙姫ちゃんも同じようで、俺たちの間に少しの沈黙が流れる。
数秒が永遠にも感じそうな沈黙の後、しびれを切らしたのか、窺うように美沙姫ちゃんが話し出す。
「そ、それでね……あ、あの……えっと……朝のことなんだけど」
「いやアレにはいろいろ深い事情ってのがあって……その……」
そっと美沙姫ちゃんが話し始めた話題で俺の心臓は止まりかけた。
「えっと、あのね、イヴちゃん海外の女の子だからでしょ？」
「え!?　ど、どういうこと？」
美沙姫ちゃんの発言は、どうやら俺にとって都合の良い勘違いみたいに聞こえる。
「その、担任の先生も言ってたじゃない、海外の文化と日本の文化は違うから困るかもって、そ、それにき、キスとかは海外だと挨拶みたいなものって言うじゃない……？」
イヴが海外から来た設定がここに来て活きてきた。
もちろん、本当は俺の股にぶら下がってる海綿体で自家発電を試みる人工知能が暴走し

てでき上がったのが朝の騒動なんだけど、美沙姫ちゃんは良い感じで勘違いしてる。
だったらこれはチャンスだ。
このビックウェーブ、乗るしかねぇ。
「そそそそそそそそうなんだよ。全く海外の文化ってわからないもんだよね」
「ややややや、やっぱりそうなんだ～。だと思ったー。だって、尋くんがか、彼女とかできたのかなって思ってびびびびびっくりしちゃったからさ。そうだよね。海外の文化って日本と違うから戸惑うことあるもんね」
「か、彼女⁉　そんなこと全然ないよ。だいたい、俺そういうのよく分からないし」
好きな人に嘘をつくっていうのは気が引ける。
それに、美沙姫ちゃんも必要以上に頷いてるのが少し気になるが、多分大丈夫だろう。
「でも、尋くんごめんね。私クラス委員長なのに、転校生のお世話全部任せちゃって」
「あぁ……全然それは……気にしないで」
「でも、二人とも転校生だっていうのに、随分仲がいいんだね、尋くんと」
「あぁなんかね。なんでだろうね」
「それは尋くんの人徳だよ～、あっ今のはダジャレじゃないからね」
これだよこれ。この感じ。

穏やかな日常が俺に戻ってきた。
美沙姫ちゃんとのなんてことのない会話。
これこそ俺の求めていた日常なんだよ。
「それでなんだけど……尋くんってお昼食べた？」
「い、いや？　まだだけど……？」
「そうなの？　あのね……私実はおべん……」
美沙姫ちゃんがなにかを言いかけた所で、ドアが盛大に開く。
振り返ると、そこに立っていたのはアナだった。
「だ、だれもいない……って御成……誰よその女？」
アナは俺たちを睨むように見ると、少し不機嫌な感じでこっちに駆け寄ってきた。
「それを言うなら『こっちの人は？』だろ」
「あっ全然気にしてないから大丈夫だよ。自己紹介がまだだったね。私、泡野美沙姫って言います。クラス委員長だから、他にもわからないことがあったら言ってね」
「別に、困ったら御成に聞くからいいもん。それで御成と美沙姫はなにしてるの？」
この転校生、俺の美沙姫ちゃんに馴れ馴れしいんだよ。
「あぁいやちょっと、別になんも……ねぇ、み、美沙姫ちゃん？」

「う、うん、取り立ててなにかはしてないよ」
なにをしているか聞かれても、なにかをしているわけじゃなかった俺と美沙姫ちゃんはなんとなく会話をごまかした。
「ふ～ん、それでなんだけど御成、他のクラスメイトはどこに行ったの？　移動教室？　もしかして置いてかれちゃったの？」
「今は授業中でもねーし、置いていかれてもねーよ。みんな飯行ってんだろ、どうせ」
「えっごはん……？　学校ってご飯が勝手にでてくるんじゃないの？」
「勝手に……？　あぁ給食か？　そんなもん無いぞウチの学校」
アナのテンションが明らかに落ちた。
「アナちゃんは転校したばっかりだから知らないかもしれないけど、うちの学校はお昼は自分で用意するの、だからみんな出前自分でとったり、食堂行ったりしてるね」
この学校のシステムも詳しくなさそうだし、というか転校してくるんだからそれぐらい知っててしかるべきだろ。
まぁ世間知らずっぽいし仕方ないか。
「むしろ高校で給食ある方が珍しいんじゃないか？　そうだよね、美沙姫ちゃん？」
俺が美沙姫ちゃんに同意を求めると、思い出したみたいに相槌をうった。

「そうだね、近くの高校だと給食あるなんて話聞いたことないな～。お母さんからもそんな話聞いたことないし……」
美沙姫ちゃんが言った瞬間、膝から崩れ落ちるアナ。
「そんなぁ……これからアタシどうすれば……」
それを俺と横で見ていた美沙姫ちゃんは小声で話しかけてくる。
「なにかあったのかな？　すっごい悲しそうだけど」
「いや、俺もわかんない」
お腹のあたりを押さえ、あたりをキョロキョロとするアナに美沙姫ちゃんが実にクラス委員長らしい優しい声で話しかけた。
「どうかしたの？」
「ううん、大丈夫……なんでもない……」
ぎゅるるるるるるる。
誰かのお腹が激しくなった。
俺と美沙姫ちゃんは、お互いに顔を見合わせ首を振った。
となるとこの音の主は一人しかいない。
二人でアナの顔を見ると、耳の先まで真っ赤。

「うわーすごい音、だれだこんな音をならしたのはー。雷かな？」
強がったアナは棒読みで話題をそらすが、全然そらせていない。
むしろ、そんなに目が泳いでいたら、私がでっかいお腹の音を鳴らしましたと言ってるようなもんだ。
「違うもん。お腹の音じゃないもん。これは……これはその……エンジンの音だもん」
俺と美沙姫ちゃんがあんまりにもじっと見つめるもんだから、アナは苦し紛れにわかりやすい嘘をついた。
「お前は腹にスポーツカーでも入れてんのか！　あぁもうお腹へってるんだったら食堂でもなんでも行ってこいよ」
「減ってないもん。お腹は減ってないんだもん。大体レディが人前でお腹なんて鳴らす訳がないじゃない」
たしかにそうかも知れないけど、本当のレディならこの状況で嘘とバレる嘘をついて、みすぼらしく足掻くなんて真似しないだろう。
しかし、そこは我らがクラス委員長。
「まぁまぁお腹なんてみんな減るものだしね。そうだよね尋くん」
レディとはこういうものだと言わんばかりの美沙姫ちゃんの美しすぎるフォロー。

「そ、そうだよ。生理現象だからな」
それに続く俺。
「だったら、御成、一生のお願いがあるんだけど……」
「なんだよ一生のお願いって？」
一生のお願いと言われ、思わず身構える俺に対してもじもじとなにかを言いたげなアナが重い口を開く。
「ご飯……食べさせてくれないかな？」
「ご飯？　財布忘れたりしたのか？」
「違うよ、そんなんじゃない。だってアタシと御成はもう付き合ってるんだからご飯おごってくれてもおかしくないでしょ？」
確かに、俺は空き教室に行った時、付き合えと言われた。
だけどそんなの、普通は冗談だと思うし、そもそも俺がそんなことを認めた覚えもない。
ただ一番の問題は、この発言を美沙姫ちゃんの前でしたことだ。
「え？」
勇気を出して振り向くと、硬直した美沙姫ちゃんの表情。
「え……尋くん……付き合ってるって……どういうこと？」

「い、いや違うんだ……そういうのじゃなくて……」
「さっき彼女いないって……」
「ももももちろんだって。全部こいつの妄想で……」
「こいつって、さっきまで私のことは名字で呼んでたのに？　しばらくしゃべらなかったらまた敬語にもどるのに……」
いやちがうんですよ、それはその好きだからこそ、敬意を払うっていうか……そのあるじゃないですかそういうの。
別に親しい間柄だから、乱暴な口調な訳じゃないんすよ～。
と、言いたかったけど、言えるはずもない。
「そんなひどいこと言うことないじゃない。アタシの大事な部分もちゃんと見たし責任とってもらわないと……」
俺という人間の人生が終わった音がした。
「責任⁉　責任って……えっちょっとまって……そっか……そっか……そうだよね。だから転校したきたばっかりなのに……、私、用事思い出したから行くね？」
そう言って、美沙姫ちゃんは逃げるようにこの場から走っていった。
「違うんだ美沙姫ちゃん。全部こいつが……美沙姫ちゃんいかないで」

俺が追いかけようとすると、ものすごい力で手首を掴まれる。
振り返ると、笑顔のアナ。
「ねぇ御成……アタシ、カレーとハンバーグと餃子が食べたい！」
お腹を鳴らし、よだれを垂らし、きっとものすごいごちそうを恵んでくれるんだろうって想像で顔が緩みっぱなしのアナ。
「ふ、ふざけんな！　お前なんかパンでも食ってろ！」
俺は自分のカバンからフランスパンを取り出すと、アナの口に強引にねじ込んだ。

第三章　AIと誠

「それで、ほんとに未来から来たっていうの？　冗談でしょ？」
イヴの初登校日という一大イベントを終え、疲労困憊の俺は自分の部屋でかれこれ三十分以上正座させられていた。
その正面には仁王立ちした詩吹が、これまた三十分以上、腕組みをして俺たちを睨みつけている。
なんでこんなことになっているかといえば、答えは簡単。
イヴがウチに来たことの事情聴取。そして俺への詩吹の説教だった。
勿論イヴが家に居着くことがわかった瞬間に詩吹の俺への説教は確定だったんだけど。
ただそんな苦痛なイベントも肌感的には終わり際。
詩吹は疲れ始めてるし、なし崩し的に許すフェイズにまでは突入しているはずだ。
「いやそれがほんとにほんとなんだって。なぁイヴ？」
「はい、ほんとうですよ。私未来から来た人工知能なんです」

「いやそんな朗らかに言われても……。信じられるわけないじゃない」
詩吹の言い分はもっともだ。
俺だって未だに信じられない。
「とにかく、私の夏服は別で買ってもらうとしても、面倒はゴメンだからね。その……部屋で……部屋で変なことはしないでよ」
「変なこと……と言いますとなんでしょう……？」
「だ、だからその……裸で……」
これ以上イヴが余計なことを言えば、説教は間違いなく三十分延びるだろう。典型的現代っ子の俺にこれ以上の正座など耐えられるはずもない。
「あぁ～発電のことっ――」
「勿論だ詩吹、俺はもうこれ以上詩吹に迷惑をかけるつもりもないし、大人しくさせるからいいだろ？」
俺はなんとか会話を滑り込ませ、イヴを封殺。
対する詩吹は合点はいっていないものの、仕方ないという雰囲気を醸し出す。
「それからイヴさんは勝手に部屋に入らないで。あとお兄ちゃん、どうせ最期まで面倒みれないなら、ちゃんと元いた所にもどさないとダメだからね」

どうやら詩吹の中では、イヴは捨て犬の類のようだ。
詩吹はそのまま部屋を出ると、乱暴にドアを閉めた。
瞬間、足のしびれは限界に達し、俺は床に崩れ落ちた。
「足がしびれて動けん……。長いんだよ詩吹……」
文句を言おうとイヴを見ると、あれだけ長い時間正座してたってのも物ともせず、俺のサブ機のノートパソコンを使って、なにやらネットブラウジング。暢気なもんだ。
どうやらアクセス先は世界一の動画共有サイト『ユアチューブ』のようだ。
もちろん運営元はこの街の電子制御システムやらの基礎を作ったＡＣＭＥ。
動画を投稿して、収入を得る人間をチューバーなんて言って、大人たちは白い目で見てたが、最近じゃごくごく普通の職業だったりもする。
「これがチューバーって奴なんですね。動画投稿するだけでお金もらえるなんて楽そうです。決めました！　私、明日から人工知能チューバー御成イヴとしてデビューします。まずはアカウントを……」
俺の部屋のパソコンを使って何をしてるかと思ったら、ユアチューブのアカウントを今まさに作ろうとするイヴに俺はまた大きなため息をついた。
「なんで未来からやってきてやってることがチューバーなんだよ！　おかしいだろ！　そ

れにもうバーチャルチューバーってジャンルであるぞ」
俺が検索すると、画面には動画の内容が端的にまとめられた文字がでかでかと書かれたサムネイルが並ぶ。
「そ、そんな……、こんなナチュラルにしゃべれる人工知能がこの時代にあるなんて……で、でもおかしいです。私今アカウント作ろうとしたんですけど、このチェックボックスをみてください」
そう言ってパソコンの画面を指さすイヴ。
指を差したのは『私はロボットではありません』と書かれた文字列と、その横にはチェックボックス。
「人工知能ってことは、ある意味ロボットじゃないですか。だったらここのチェックボックスにはチェックできないはずですよね。ってことはアカウントも作れないから動画も上げられないはずです。なのに、私以外の人工知能たちは動画上げてますよ。これは紛れもない規約違反。えっと……通報は……ここからできるみたいですね。えっと……私のアイディアをパクった動画っと……」
「自分のアイディアが二番煎じだったからってライバルをなんとか潰そうとすんな」
「だったら、どうやったら私は楽してお金儲けできるんですか。未来から来た人工知能系

チューバーだったら、数多のチューバーを出し抜いて完全に頂点とれると思ったのに……」

「大体なんで金欲しいんだよ。人工知能は金使わねーだろ」

だいたいチューバーなんて、毎日動画あげなきゃいけないわけだし、簡単そうに見えて、意外と大変っていうものの典型だ。

今日日、小学生でもチューバーは毎日編集で忙しそうだから、なりたくないって言うぐらいだからな。

「全部マスターの為です。お金の力があれば、作りたい時にハーレム作れるじゃないですか。はっ！　そうです、そういう動画はどうですか、社会的地位をちらつかせて、誰が自分にふさわしいかみたいな動画！　これなら絶対バズりますよ」

「それももうあんだよ。ハンサムで社会的地位つよつよの奴を誰が射止めるのかみたいな超ゲスな動画が。動画はジャングルプライムで好評配信中だ」

コマーシャルでそんな内容の動画を見た時、こんなゲスな内容で誰が見るんだよと思ったが、案外人気でシリーズ化もされている。

なんとも人の業は深い。

「お金も稼げない、ハーレムも作れない。私はこの先どうすればいいんでしょう」

「そのことで話があるんだけど……」

これ以上自分の気持ちを誤魔化したら、イヴが暴走しかねない。

「とうとうハーレム作る気になったんですか？　それとも充電ですか？　まっ、どうせ私の意見なんて聞いてくれないんでしょうけど～」

「なんだよ、随分な言いようじゃん」

「だってマスター美沙姫様が好きって言ったくせに、なんかよくわからんクソガキの転校生と付き合い始めましたし～」

「いや、それは……その」

「いやわかりますよ、いきなり転校生に付き合えとか言われて、しかも美沙姫様のまえで。頭が回ってないと思います。でも美沙姫様のことを本気で想っているなら、否定出来たはずですよ」

「返す言葉もございません」

ため息まじりのイヴの言葉に反論のしようがなかった。

あの時、違うんだと言う勇気があればこんなことにもならなかった。

「私はハーレムでもなんでもいいのでマスターが幸せになってほしくて協力してるんですよ。もちろん世界の命運も大事ですけど、なにより大事なのはマスターの意思なんです。

なのにマスターときたら……本気で美沙姫様のこと想ってるんですか？」
イヴの目、俺を真剣にじっと見つめていた。
「――俺、美沙姫ちゃんと付き合いてぇ。いや結婚してぇ！」
そう言うとイヴは俺に優しくほほえみかけてくれた。
「その覚悟、たしかに承りました。だったらイヴも本気で応援させていただきます。それじゃこれから忙しくなりますね」
「えっ、なんで？」
「なんでって、相手はクラスのアイドルですよ？」
「だからそれと忙しくなるのになんの関係があるんだよ」
俺の質問に、イヴは部屋中の空気が無くなるんじゃないかっていうぐらい空気を吸い込んだ後に、これまた深い深い溜息をついた。
「たしかにマスターは、未来でスーパーエンジニアとか言われて調子に乗ってますけど、根本はクソ童貞を拗らせたオタクなわけですよ？」
「その未来の俺に微妙な棘がある表現はなんなんだ」
イヴの言葉から推測すると、未来の俺はどんだけクソ野郎なんだって不安になってくる。
「いちいち茶々いれないでください！　ともかく美沙姫様からすれば恋愛対象から外れて

いるという可能性も高いわけですよ」
今の今まで忘れていたことだけど、イヴの言葉で思い出した。
俺はクラスの一番後ろからクラスメイトを眺めているから分かるけど、ふとした瞬間に美沙姫ちゃんに熱い視線を送っている男子生徒はけっこういる。
同族だからこそそれは簡単にわかってしまう。
「た、たしかに……」
「よーし、そうと決まれば、今からお風呂に入りましょう」
「風呂？　なんでだ⁉」
「いいですかマスター？　女の子ってのは清潔感ってものになにより敏感なんです」
「それは聞いたことあるわ」
なんでかわからないけど、爪が長い男みたいな清潔感のない男は嫌われるってどこかで聞いたことがある。
「そうなんです。となると、常にきれいな状態を維持しなきゃいけないわけですよ。ですから私がマスターの体を綺麗に管理しなきゃいけないわけです」
これに関してイヴの主張はまったくもってその通り。
「じゃあまずは風呂入るわ。お前は詩吹に言われたとおり、大人しくしてろよ」

俺はイヴを部屋に残し、一階に降りると、脱衣室で風呂に入る準備を整え、いざ浴室へ。
イヴの言うことが正しいのなら、いつも時間がなくてシャワーで済ませてるのも多分ダメだよな。
そう思って、体を流し、湯船に浸かると、全身の疲れが抜けていくような気がする。
海外で生活していた時には、湯船なんて浸からなくてもいいよなと思っていたが、やっぱり湯船に浸かると、自分の中にある日本人の遺伝子が呼び覚まされるような感覚がある。
うとうととそんなことを考えていると浴室のドアが開き、入ってきたのはイヴだった。
「ぬわっなんなんだよお前！　大人しくしてろって言っただろ！」
「はい、ですから、大人しくお風呂に入りました。何か間違ってたでしょうか？　それにマスターがちゃんと体を洗ってるか確認しないといけませんから」
そう言って不敵に笑うイヴの視線の先には俺の股間。
「はっまさか、お前風呂に入れって、俺に充電させるために！」
「そ、そんなわけあるわけないじゃないですか。マスターのお背中を流すためですよ」
「嘘にきまってんだろ。そんな気の利いたことやるやつは、そんな不敵な笑みを浮かべないんだよ。それに妹に大人しくしてろって言われただろーが」
「勿論わかっています。けどここで充電を諦めたら今日使ったエネルギーの損失分が無駄

になってしまいます。ソシャゲのガチャで一万円使ってお目当てのキャラが出なかったら、出るまで回さないと最初の一万円が無駄になってしまうのと同じです」
「そんな歪んだコンコルド効果と俺の純潔を一緒にするな」
俺の肩を掴み、お風呂で充電する気のイヴ。
なんとか浴槽から、立ち上がり脱衣室に向かおうとする俺。
お互いの力が拮抗した瞬間だった。
イヴの足元が一瞬もつれた。
きっと、俺が頭を洗った時に、床に落ちた泡が流しきれていなかったんだろう。
立ち上がろうとする俺の力とイヴの押さえつけようとする力の均衡が乱れ、俺はイヴにおおいかぶさるような形で浴室のドアに突っ込んだ。
派手な音とともに、ドアに突っ込み、俺たちは脱衣室に倒れ込んだ。
当然、その音を聞きつけた詩吹が階段から降りてくる音も聞こえ、同時に脱衣室のドアが開く。
「ねぇお兄ちゃんたち私の話、聞いてた？　二人とも正座して」
「はい……」
青筋立てた詩吹の冷たい視線が俺たちに突き刺さった。

続きは、10月17日発売のファンタジア文庫で！

©Yon Kiriyama, Yoshimoto 2020